

AP カンファレンス

「大学を考える—古典から現代の大学、そして現代社会、未来社会の構想の視点から、APU へ」

■登壇者／開催日時・場所

▼登壇者

- ・司会兼基調 清家久美 APU 教授
- ・パネラー 出口治明 APU 学長
最首英裕 Groovenauts 代表取締役社長
アスキュー・ディヴィッド APU 准教授

▼日時 12月1日(土)11:00～13:00

▼場所 H202

■全体概要

そもそも大学とは一体なにか、現代社会に大学が求められていることはなにか、社会はどのように変わっていくのか、変動する社会において大学はどのようになっていくことが必要なのか。

今回の発表は、これまでの大学、現代の世界的な大学の現状と動向、そして未来社会における大学のあり方を検討し、さらに APU がどのような大学になっていき、どのような大学として必要とされているかを議論する。APU 教授・清家久美の基調として大学像の模索について、APU 教授 Askew 氏による大学の本来像について、APU 学長出口氏により、大学のあり方の提案と APU の今後について、さらに Groovenauts 社長最首氏より、未来社会のあり方と大学の未来と議論してもらう。

■各概要

▼出口治明 APU 学長

「理想の大学像—大学の本質から考える」

大学の理想は、アズハル(アル＝アズハル大学)の三信条にそのヒントがあると考えている。その大学は970年にカイロに創設され、世界で最も古い大学である。三信条とは、「入学随時」——勉強したいと思ったらいつでもきてよい、「受講も随時」——自分の好きな、知りたいと思う講義だけ受けられる、「退学も随時」——自分で疑問が解けて、勉強したいことがわかったらいつでもやめることができる、というものである。非常にシンプルな理念ではあるが、大学の理想ではないかと考えている。日本の大学のような同質性はなく、年齢制限も、ジェンダーも、人種も、国籍もすべての前提条件なしに、だれでも学ぶことができる場、多様な人々が混ざって勉強する場が大学の理想だと思っている。APU はそのような場になる可能性を持っている。変化しつつあるグローバルな社会と、日本社会、そしてそこで求められる大学像をこの APU の可能性として議論したい。

▼最首英裕 Groovenauts 代表取締役社長

「未来社会の構想と大学について」

ディープラーニングの AI と量子コンピューターにより、社会はこの5年で大きな変化をとげることが予想されている。どのような社会になるのかという問題については、いくつかの大きな方向性が見受けられる。私が最新のテクノロジーを観察する中で見出したのは、テクノロジーによる人間疎外ではなく、人類学者のレヴィ＝ストロースが「道具は人間に近づいてくる」と言うように、人間の積極的な感情が求める方向にその進化が進んでいるということである。人が機械に使われるという事実は実証性が低く、実は社会はそのようには進んではいないという実感の中で、AI 企業を展開してきた。仮に前者の事実があろうとも、そうではないもう一つの方向が存在することもまた事実である。

AI に関われば関わるほど、人間と人間社会の大きさに気がつくばかりである。結局、人類は産業革命を経て「機械」がとてつもない経済的価値を生み出すことに気が付き、「機械」を上手に使いこなすために人間が奉仕するような時代が続いていた。しかし技術の発展により機械は小型化し、機械の制御は機械ではなくソフトウェアが行うようになった。こうした発展すら、人間がいつまでも機械の奉仕者であることを認められなかった人類の、執念のようなものであると考えることができる。そうした事例から、人間は材料ではないということ、人間自体がもがきながら求めているのではないかとということである。

そうしたことを前提に、高度なテクノロジーを使うことになるだろう若者が、大学でなにを勉強することがよいのか、そして彼らが卒業後どのような社会において、なにをしていくことになるかという問題を考える中で、現代の大学、そして未来の大学像を提案したい。

▼アスキュー・ディヴィッド APU 准教授

「宮廷人の、武人の、学者の、目、口、剣」—大学・大学教育とは何か

しばしば指摘されてきたとおり、戦後日本では大学に進学する一八歳人口の割合が増加してきたが、大学の数も激的に増加して、しかも少子化のため、学生の総数が低迷している。殊に大学の数の増加と少子化でいわゆる過当競争状態が発生し、今や多くの大学(特に地方の小規模大学)が生き残りの瀬戸際に立たされている。大学の生き残りが熾烈になっていることの左証として、定員割れや大学の破綻や倒産、大学や学部の閉鎖、縮小が挙げられる。長期的にみれば日本の多くの大学が存立の危機に瀕しているといって過言ではなからう。

一方、大学そのものの生き残りもさることながら、大学の在り方、大学教育、教養の崩壊も様々に批判の槍玉に挙げられている。

一八歳人口の進学率の増加は大学教育の内容に著しい影響を及ぼし、教育水準の激的な低下を招いたこともしばしば論難されてきた。トロウはかつて、その『高学歴社会の大学』などで、大学進学率・大学在学率に焦点を絞って、15%未満という時代の大学をエリート型大学、15%から50%までをマス型大学、50%以上をユニバーサル型大学という三つの段階に分けて検証している。日本はユニバーサルの時代に突入してきた。このことを理由に、もはやエリート型大学の教育はできないとたびたび論じられてきた。それというのも、進学率の増加は学生の質の低下を意味するからである、と(エイミスのかつての言葉でいえば、「より多くはより低質を意味する(more means worse)」)。

ただ、アメリカ合衆国などの例にもあるように、エリート型大学の時代の終焉した国において、ハーバード大学などのエリート型大学が生き残るのみならず繁盛することも十二分にありうる。私見では、生き残りを図るためにも、ユニバーサル時代になったからこそ、質の高いエリート型大学の教育(教養主義)を固守して然るべきである。今回の発表で、大学の在り方、大学教育の在り方を検討していく予定である。

▼清家久美 APU 教授

「ドイツ観念論における大学論、そしてポスト構造主義、新実在論における大学論—ヘーカントからデリダ、そしてガブリエルへ」

学問の自由を大学の自由として定式化した最初の哲学者であるI.カントは、『純粋理性批判』において「私は何を知らるか」、「私は何をなしうるか」、「私は何を希望することが許されているのか」を問い、知や実践よりも、希望と信に着目するカントの第3の問いに即して学問の将来を模索する。自らが信じていることを他者の前で自由に公言することができる場として大学を論じており、それはフンボルトの大学の自律性や大学での教養の素養の主張に継承されている。さらに現代において、ポスト構造主義・哲学者であるJ.デリダは、『条件なき大学』において、カントの議論を批判的に踏襲し、学問の領域横断性や隣接性の創造、またコレージュの友という概念による他者に対する歓待の原則、などを大学を考える上での重要なキー概念を提案している。また、ポスト構造主義を批判し、現代最も新たな潮流を生み出しているM.ガブリエルによる新実在論における大学論を、人間のそもそもの認識様式から考察する。本発表は主にドイツ観念論における大学論から始まり、現代思想としてのポスト構造主義、さらにより新しい新実在論における大学論を検討しつつ、そこに通底する問題から現代の大学論を模索する。